

Ray / レイ

2005(平成17)年2月5日鑑賞(OS劇場)

★★★★



監督=テイラー・ハックフォード/出演=ジェイミー・フォックス/ケリー・ワシントン/
レジーナ・キング/クリフトン・パウエル/ハリー・レニックス/アーンジャニュー・エリス/
シャロン・ウォレン/C.J.サンダース/カーティス・アームストロング/リチャード・
シフ/ラレンツ・テイト (UIP映画配給/2004年アメリカ映画/152分)

……あの盲目の黒人歌手レイ・チャールズが2004年6月10日、73歳で亡くなった。まさに「魂の叫び」と表現すべき、レイ・チャールズの『愛さずにはいられない』を聴いたのは1962年で、私が中学生の時。この映画を観れば、彼の一生は女性問題、ヤク問題、所属会社問題等々波乱に満ちたものだったことがよくわかる。しかし好きな音楽を好きなだけやり、ものすごいエネルギーで走り続け、最後には12人の子供と21人の孫、5人の曾孫に恵まれたその人生はまさに最高！ 感動モノだ！



アカデミー賞最優秀主演男優賞の有力候補

この映画で、レイ・チャールズを演じたジェイミー・フォックスは、盲人になりきるためにまたレイ・チャールズになりきって話したり歌ったりするためにさまざまな苦勞をしたとのことだが、その演技は鬼気迫るものがある。さらに、たび重なる女性問題を理由とする妻との対立や音楽活動上のパートナー兼愛人との間に生ずるさまざまな対立、その他生きていく上で見せるレイ・チャールズの喜怒哀楽の表現もものすごい。他方、音楽に関して示す彼の才能はまさに天才。次から次へと浮かんでくる構想を実現させ、魂を込めて歌うその姿は、観ているだけで感動を誘う。この映画を観てはじめて、この曲はこんな状況下で生まれたものだということがわかるし、人間の心に響く歌をつくり出す作業とは、まさに自己の心を表現するものだということがよくわかる。

こんなレイ・チャールズの生きてきた姿をここまで見事に演じきったジェイミ

ー・フォックスが第77回アカデミー賞主演男優賞にノミネートされたのはきわめて当然のこと（ちなみに彼は同時に『コラテラル』で助演男優賞にもノミネート）。さてその結果は……？

レイ・チャールズの音楽

私がレイ・チャールズの曲で1番よく知っているのは『愛さずにはいられない』。これは1962年の大ヒット曲だが、その当時私は中学校1年生か2年生。歌を聴いていても英語の歌詞は断片的にしかわからなかったが、その圧倒的な迫力に圧倒されたもの。そしてその歌声は耳から離れることはなかった。エルビス・プレスリーのハデハデしい音楽(?)よりも、こちらの方がよほど心にしみこんでいたものだ。

この映画を観ていると、彼の代表作である『我が心のジョージア』(60年)その他数曲はよく聴いていた曲でなつかしいものだが、単にそれだけでなく、「魂の叫び」ともいえる彼の音楽のルーツがどこにあったのかがよくわかる。また、歌手レイ・チャールズとして有名になる以前は、黒人のソウル歌手の代表であったナット・キング・コールとチャールズ・ブラウンの物真似にすぎなかったらしい。なお、映画の中では有名な実在のアーティストであるクインシー・ジョーンズ(ラレンツ・テイト)も登場するから要注意！

パンフレットを読み映画の中でその音楽を聴いていると、①『アイヴ・ガット・ア・ウーマン』(54年)によるゴスペルとリズムアンドブルースとの融合、②自らの恋の体験を素材にした斬新なサウンドの『ホウッド・アイ・セイ』(59年)、③「大衆化」との批判を受けながらもグラミー賞を獲得した彼の代表作『我が心のジョージア』(60年)、④周囲の心配を受けながらカントリーに転じた中で発表し最大のヒット曲となった『愛さずにはいられない』(62年)など、彼の音楽の変遷ぶりがよく勉強でき実によく理解できる。

なぜ彼が……？

もっとも、なぜ彼がこんな音楽活動ができたのかについては、この映画を観ても実はよくわからない。その答えは、多分、「彼は生まれながらの天才だったか

ら」ということだろう。パンフレットによれば、レイ・チャールズ自身も「私は体の内側に音楽を抱えて生まれた。そうとしか説明のしようがない」と言っているとのこと。彼の73年間の軌跡をみても、彼が音楽の神様から特に目をつけられていたと思わせる要素は何もない。7歳の時に緑内障を患い盲目となった後、盲学校へ入り、作曲、クラシックピアノ、トランペット、アルトサクソフーン、クラリネットを学んだということしか音楽との接点はないのだから。

映画の中には、視力を失う前のレイ・チャールズが黒人の弾くピアノに興味を示し、その黒人から鍵盤の弾き方を教わるシーンが登場するが、こんなことは子供の頃、誰にでもよくあること。そんなちょっとしたピアノへの興味や盲学校での音楽の訓練だけでこんな才能が育つはずがない。やはりレイ・チャールズは、黒人特有の音楽性は当然のことながら、生まれながらにして音楽の神様が選んだ天才だったのだろう。

レイ・チャールズが背負ったトラウマと母親の存在の大きさ

映画の中でもパンフレットの中でも、レイ・チャールズの父親については何ら触れられていないので、父親については全くわからない。

1930年に生まれたレイ・チャールズの人格形成に大きく寄与したのは母親のアレサ・ロビンソン（シャロン・ウォレン）。アレサは洗濯女の仕事をしながら、レイ・チャールズと弟のジョージの2人を育ててきた、芯の強いしっかりした女性。貧しいながらも何とか幸せな生活を続けていたが、ある日レイ・チャールズがジョージと遊んでいた時、ジョージは誤って大きな洗濯桶の中に頭から落ち込み、溺死。何も手を出すことができずこれをじっと見つめていただけの幼いレイ・チャールズにとってはこれがトラウマとなり、一生その記憶から逃れられないことになった。そしてその9カ月後、レイは緑内障を患い、7歳にして完全に視力を失うことに……。

そんなレイを時には励まし、時には突き放しながら、常に母親としての大きな愛情を注いできたアレサのことを、レイが一生忘れることができなかつたのは当然。この母親の存在がレイの人格形成に具体的にどのような影響を与えたのかを心理学的に分析しても仕方がないが、31歳という若さで死亡したアレサがレイ・

チャールズの人形形成に大きな影響を及ぼしたことはまちがいない。

赤裸々に描かれる女性遍歴！

まず客観的に、この映画で描かれるレイ・チャールズの女性遍歴(?)を確認しておこう。彼は盲目ながら「手首を触って美人を見分ける」ことができるとのこと！ ホンマかいな……？ しかし映画の中ではそれがバッチリと決まっていたからあら不思議！ 彼があつという間に恋に落ち、結婚を望んだのは、ゴスペルシンガーのデラ・ビー・ロビンソン(ケリー・ワシントン)。結婚後、子供にも恵まれ、レイ・チャールズの歌手としての成功とともに2人の生活は豊かになり、デラの幸せも広がっていくかに見えたが……。

第1の愛人は？

レイ・チャールズの最初の愛人は、レイ・チャールズとの掛け合いでバックヴォーカルをしていたメアリー・アン・フィッシャー(アーンジャンュー・エリス)。レイ・チャールズの仕事はステージで歌うことだから、バックバンドやバックヴォーカルなどのメンバーはいわば仕事上不可欠の付き合い。したがって、時間的にも家庭における妻以上の長い付き合いとなるのは当然。したがって、その中で職場恋愛、職場不倫が生まれても当然だし、誰もが天才歌手レイ・チャールズを尊敬し、慕っているのだから、彼の立場からはよりどりみどり……？ その結果、まずはメアリーといい仲に……。

第2の愛人は？

第2の愛人は、これも3人の女性バックコーラス、レイレッツの一員であるマージー・ヘンドリックス(レジーナ・キング)。このマージーはかなり押しの強い女性。メアリーに代わって愛人の座を奪い取った(?)だけでなく、子供が生まれると、マージーはデラとの離婚をレイ・チャールズに迫ることに……。さあ大変、彼はこれらの女性をどのようにさばくのだろうか？

映画の中に登場する女性関係は以上の3人だけだが、73歳で亡くなったレイ・チャールズには、12人の子供と21人の孫そして5人の曾孫がいたとのこと。そう

するとこれらの子供や孫たちの母親は一体誰……？ きっとこの3人だけではないはずだ。何とも華々しい(?)女性遍歴だと言わざるをえない。

妻の悩み、愛人の悩みそしてレイ・チャールズの悩み

男の私が思うに、レイ・チャールズは、決して浮気者とか女にダラシのない男というわけではない。妻に対しては誠実に家庭を守ろうとしているし、愛人に対してもそれぞれ誠意を尽くしている。さらにそのバランスも大きく失うことなく、誠実に尽くしていると思えてしまう。愛人のマージーに子供ができたことはもちろん妻のデラには知らせていないが、マージーと別れた後もきちんと養育費を支払っていたし、マージー死亡の連絡を受けた時は、妻の目の前で泣き崩れたほどだ。もっとも、以上はあくまで男の目で見えた都合のいい話か……？

平凡で幸せな結婚生活を夢みて結婚したデラにとっての第1の難関は、一般的な言葉で表現すれば、レイ・チャールズの浮気・不倫。これはどこにでもよくある話だが、彼の場合はかなりこれが徹底していたから、その悩みが深かったのは当然。もう1つの難関は、レイ・チャールズの麻薬。あるきっかけでそれを発見し、「やめて」と迫ったものの、彼からは「絶対にやめない」と「逆宣言」されたから、こりゃ大変！

他方、愛人にだって言い分がある。特にマージーの主張は強硬で、音楽がすべてのレイ・チャールズにとって、その音楽におけるパートナーである自分が絶対的な存在だと信じ込んでいた様子。彼が離婚して自分と結婚してくれると本気で考えていたのかどうかまでは、映画上では描かれていないが、マージーが本気でそれを迫ったことはたしか。なぜなら、それを明確に拒否されると、マージーは自暴自棄になって酒と麻薬に救いを求めざるをえなくなり、結局レイ・チャールズの元を去っていったのだから。ある意味で、このマージーは純粹に音楽家としてのレイ・チャールズを愛していたことはまちがいない。

その他、妻の悩み、愛人の悩み、そしてレイ・チャールズの悩みは多種多様(?)で奥の深いもの。しかし、このような人間の煩惱は決してマイナス面ばかりではない。なぜならそんな人間としてのあるいは男と女の悩みの中から、レイ・チャールズの新しいヒット曲である、『ホワッド・アイ・セイ』や『アイ

『ザ・ガット・ア・ウーマン』が誕生したのだから……！

ヤク中だったレイ・チャールズ

音楽に才能を示し、自分自身もその方面に自信を持ちながらも、レイ・チャールズは幼い弟を溺死させたこと、そしてその防止に自分が何の役にも立たなかったことが大きなトラウマとなり、コトあるごとにその恐怖心に襲われていた。その結果、レイ・チャールズがとった行動は……？

それは最も安易なもの、すなわちヤク（麻薬）に頼ることだった。当時既に音楽活動をかなり成功させていたレイ・チャールズは、自分自身ではイザとなればいつでもヤクをやめることができると考えていたはずだが、ヤク中とはそんな甘いものではなかった。そのため、音楽界での成功を積み重ねていく中、他の多くの著名な芸能人がさまざまなトラブルに巻き込まれたのと同じように、レイ・チャールズも薬物の所持・使用によって大きな試練を迎えることになった。

この映画は、そんなヤク中、レイ・チャールズの実像も容赦なく赤裸々に描いている。そしてその面における俳優ジェイミー・フォックスの迫真の演技も感動モノ！

ビジネス面でも天才……？

一般的にユダヤ人や華僑は商売上手といわれているが、黒人がそうという話はあまり聞いたことがない。しかし、この映画を観ていると、黒人にも意外にビジネス面での才能があるのかなと思ってしまう。

レイ・チャールズは、もちろん自分の音楽に自信を持っているからだろうが、その音楽におけるビジネスの切り拓き方でも天才的！ どんな芸能人でも転機となることが2度や3度あるのが当然。レイ・チャールズにもそれが巡ってきたが、彼はその都度それを前向きに転換させ、より大きく成長していった。そしてそこには、天才的な音楽の才能の他、この映画を観ていると超人的な「体力」もかなり寄与していることがよくわかる。

最初にレイ・チャールズを売り出したクラブマネージャーの女性マーリーン・アンドレ（デニース・ダウス）は大きくピンハネしていたが、そこを飛び出した

レイ・チャールズをその後長い間にわたって支え続けたマネージャーがジェフ・ブラウン（クリフトン・パウエル）。そしてレイ・チャールズの音楽のすばらしさを見抜き、これをレコード化するについて献身的に尽くし大成功をもたらしたのが、アトランティック・レコードのアーメット・アーティガン（カーティス・アームストロング）とジェリー・ウェクスラー（リチャード・シフ）の2人。これを見ていると、レイ・チャールズが音楽の世界で成功するについて、いかにいい友人たちに恵まれていたかがよくわかる。しかしレイ・チャールズも神様ではなく欲や疑念をもつ人間。その音楽界での成功が大きくなるにつれて、1959年にはABCレコードからの「札束攻勢」によって移籍したり、40年以上も彼が信頼したマネージャーであったジョー・アダムス（ハリー・レニックス）と対立したり、さまざまなトラブルも発生することになった。

しかし、これらの人間的な「弱さ」も含めて、レイ・チャールズはビジネス面においても天才的と言わざるをえない。

感動がいっぱい！

この映画には感動がいっぱいつまっている。レイ・チャールズの音楽のすばらしさは言うまでもないが、その他にも、レイ・チャールズの恋と結婚そして女性遍歴の数々もすばらしさでいっぱい。またレイ・チャールズの人生に決定的な影響を与えた母親アレサとの母子関係については涙なくして観ることができない。貧困や黒人差別との闘いの他、7歳にして視力を失うに至る前後の母と子の「闘い」のシーンは迫力十分。そして、盲目になった7歳のレイに対して母親アレサは、「2度までは教えるけれども、3度目は教えない！」と言い放ち、貧困と人種差別のうえに盲目という苦難を背負いながらも、なお自分の力で生きていかなければならないことをレイに教えようとした。こんな母アレサがいたからこそ、その後のレイ・チャールズが存在しえたことは明らかだ。こんな母子の人間ドラマが感動を呼ばないはずはない。

とにかくこの映画は感動がいっぱい。アカデミー賞主演男優賞に並んで作品賞と監督賞にもノミネートされたのは当然だろう。

2005(平成17)年2月7日記